

W.A. Mozart Hiroba

「モーツァルト広場」 SINCE 1995

第44号

〈リヤカーおじさん〉の衝撃

モーツァルトへの手紙 (その20)

会員番号 K.618 加藤 明



◇モーツァルトよ、前号でも記述したように今年の春以降から猛威を振るってきた地球規模のコロナウィルス禍が、いまだにその終息をみない昨今です。

そんな長きにわたる感染への警戒を余儀なくされる中、小生は相も変わらずあなたの創ったあまたの名曲名盤を聴きながら、秋田市から五城目町の【道の駅】までの往復70キロをあたかも日常的な〈旅〉のように通いつけている毎日です。

振り返ってみると、あなたはよく知られている通り、36年にも満たない生涯のうち、10年以上もの途方もなく長い間〈旅の生活〉を送ってきたのでした。そして、その旅の先々で異国のさまざまな人たちとの出会いに恵まれ、最期まで己の天才を研磨し続けたのは皆がよく知るところです（あなたの旅は25歳までのザルツブルク時代は11回、ウィーンに転進してからも実に6回、計17回を数えましたね）。

多くの識者が唱えておりますが、〈旅〉は「自分の力で物事を考える」という自立心を成長させる大変有効な手段と言えるようです。あなたは正に、父上レオポルトに連れられ幼少から続いたイタリア旅行、青年期ながら母上マリア・

アンナに付き添われたパリ旅行、そしてウィーンでの独り旅などを体験する中であって、自分の考えを失わずに事に仕える「歩き方の達人」（小林秀雄）でした。あなたが旅の先々で家族に送った実に700通を超える書簡がそのことを伝えています。

旅先では、何も王侯貴族におもねったり、諸国の優れた師匠に教えを乞うたり、演奏仲間とおつきあいすることだけが成長の糧となった訳ではないはずですよ。

言葉や習慣の異なる市井の人々との多様な関わりの中で自然にあなたは特異な感性を磨いてきたのでした。まあ、そうした体験が後に多彩なオペラの創作にも十分に活かされたと言えそうです。小生は今ではあなたのこうした旅の日常性に関する想像力を持たずして、あなたの紡ぎ出した音楽を語ることはあなたの大切な姿を見失うか見誤ることになるのでは？と考えるようになりました。

〈旅〉と言えば、小生が勤める【道の駅】という施設はその立地条件や機能性を見込んで、日ごろから多くの旅人が何処からともなく立ち寄っては何処とはなしに去って行く、という言

わばく旅〉の一つの交差点のようなところですが。その殆どが自家用車での旅なのですが、時にはバイクや自転車、はたまた徒歩での旅行者も散見されます。そんな中、9月の下旬に突然出現した驚くべき道具(?)と共に立ち寄った奇異なる人物のお話を今回はあなたにご紹介したいと思います。

その驚くべき道具とは、今では全くと言って見ることのない「リヤカー」なのですが、今回はあたかも「庵のようなリヤカー引き」のおじさんとの出逢いについて語ることにします。



山々の紅葉にはまだ少し早く、刈り取られた稲の代わりに道端のすすきが揺らめいて一層秋の深まりを感じさせる9月の末のことでした。

その日の夕刻、【道の駅五城目】の休憩室に隣接した駐車場に初老のリヤカー引きは忽然と姿を現したのです。うわさを聞きつけ、どんな変人かと興味津々そのリヤカーのある駐車場に駆け出しました。驚きました。何と、リヤカーとは言っても、一見して「動く手作りホテル」を想わせる立派な屋根を被せたもので、居間と寝室が一体となった特種車両、存在感たっぷりの庵(いおり)とでも言うべき「住居兼用リヤカー」がそこに鎮座していたのですから。

よく視るとそのリヤカーの青いペンキが塗ら

れた屋根には真っ赤な文字で、

【包丁研ぎ・一本三百円】**蚯蚓屋**(ミミズヤ)という看板が載っているではありませんか!?!しかも、丁寧にも看板文字の下には《平成三十年六月新潟発 徒歩の旅》という副題というかタイトルまで書かれていたのです。また、**リヤカー**の後方部には追突防止策として、黄色の蛍光塗料で大きくリヤカーとペンキで書かれていたほか、初心者用の若葉マークも三枚張られ、しっかりと交通安全への配慮が施されていることに感心してしまったのでした。

「これはただ事ではない!」と直感した小生は、二年半前に新潟を出発(出奔?)して一人旅を続ける**蚯蚓屋**のあるじに心底興味を覚えたのでした。

件のおじさんとは初対面ながらすぐに打ち解けた話ことができました。圧倒されたのは澄んだ眼をもつおじさんから滲み出る気負いのない明け透けな人柄でした。

また、重いリヤカーを引いて一日平均30キロに及ぶ距離を歩くというその肉体は、瘦身ながらしたたかな強靭さを感じさせて余りあるものでした。

こうして、おじさんの内に秘めた凛冽さと達観した姿勢を感じとった小生は、すぐに「流浪の詩人(うたびと)」とか「清貧なる哲人」といっ



た形容が脳裡をかすめました。そして、あの「ゆく河の流れは絶えずして、しかも、もとの水にあらず・・・」と世の無常を美しい言葉でつづった「方丈記」、鴨長明を連想してしまったのですが、独り者の長明との違いはおじさんには子供が五人いること、そして何よりも、長明は晩年世を捨て方丈（手製の四畳半の庵）での隠遁生活者であったが、おじさんは社会との関りを大切にしている孤高の旅人である点でした。

◇

『ここにはどちらから入ったのですか？』

『今朝大湊村から八郎湊を通過して来たよ・・・』

『その前は？』

『男鹿の海岸沿いを歩いてきたんです。男鹿は絶景だったなあ！・・・』

こんなやりとりの間、おじさんの人を受け容れる柔らかな表情と澄んだ眼差しにいつしか惹かれていく己を強く意識していました。

『今日はここに泊めさせてもらいます。これから明日からのことを・・・』と地図を持ち出したおじさんに、『ところで、明日はどちらへ行くんです？』と尋ねる。

『いずれ盛岡に出て三陸の方から南下したいと思っているんだけど・・・』

『それなら、上小阿仁から阿仁前田に出て国道を下って田沢湖を観ながら仙岩峠を越える道の方が近くて良いかもしれませんね。田沢湖はきれいですよ！』

『そうだろうね。阿仁に行く方が鹿角よりはる大分近いみたいだね・・・』

などと、この先の旅程について自然に対話が弾んでいったのでした。

『ところで、明日の朝、包丁3本研いでもらえますか？』

咄嗟の小生の依頼に、『ああ、ありがたい。よろしく願います・・・』といった「商談」まで交わして、その日はおじさんのリヤカーに

別れを告げました。

◇

翌朝は好天に恵まれ、8時に【道の駅】に着いたら、にこやかなおじさんがすでに包丁研ぎの準備をして小生を俟って来ていました。早速レストランから包丁3本借りてきておじさんに渡す。

開口一番、『なかなかよく手入れをしていますね・・・』

おじさんの仕事場はリヤカーの脇で、すでに駐車場より一段高いオープンスペースの一角に陣取ってつくられていました。それはとても、好い眺めでした。



研ぎながら『一本15分位かかるけど、9時頃には出来上がりますよ・・・』と。

9時の営業開始と同時に、おじさんが三本の包丁を新聞紙にくるみ、相変わらずにこやかな表情をたたえながら物産館に入ってきました。

『よかった、ありがとう！』とすぐにおじさんに1000円札を差し出しました。お釣りの100円を取り出そうとするおじさんに『お釣りはいいですよ』と制し、たまたま持ち合わせたもう一枚の1000円札と売り出したばかりの自慢のキイチゴキャンディーを一緒に差し出しました。その時の、ああ、おじさんの満面の笑顔！〈こんな素朴で美しい笑顔があるんだなあ！〉。一ヶ月2万円の生活費で二年半もやりくりしているおじさんのこの喜びの表情に、不意を突かれた小生は、なぜか胸にジーンと来るものを禁

じ得ませんでした。



いよいよ、おじさんが【道の駅五城目】を後にする時がきました。

何となく別れを惜しむ小生に、『私にとっては、道の駅というのはほんとに有難いところなんだ・・・』とおじさんがポツリ。この言葉の重み、長く利用している旅人ならではの実感のこもった一言がどれほど小生の励みになったか知れません。

やおら小生は持っていた名刺を差し出しました。初めて名を名乗りながら・・・。

そうしたら、おじさんも四国八十八ヶ所霊場順拝のお札に名前と上越市の自宅住所を書いて小生に手渡してくれました。別れ際の自己紹介。魔訶不思議な名状しがたい対峙の儀式。一瞬時間が止まりました。

振り返ると、その時、実りの秋と老年、自由と責任、旅と隠遁、豊さと貧しさ、歓喜、悲哀、羨望、激励、家族、望郷、労働、孤独、情報、そして儂さと祈り、これらが一気に収斂されて襲い掛かり、小生に沈黙を強いたのです。

その後、小生は**蚯蚓屋**のおじさんに人目を憚らず手を振って見送りました。

駐車場から国道に出て一路R285を上小阿仁村めざしてリヤカーを引くおじさん、その姿が完全に観えなくなるまで追いつけたのでした。



ところで、あの時のBGMのモーツァルトはなんであったろう？

あのおじさんの雄姿を讃えるモーツァルト、あの秋晴れの清々しい朝にピッタリのモーツァルトの曲は何かなあ・・・？と想いを巡らしました。

モーツァルトよ、小生が熟慮の末に選んだ一曲は、あなたが独立して間もないころに急いで創った澁漑たるハ長調のシンフォニー、リンツ(k.425)で、とりわけ、三拍子ながら行進的で瑞々しさ溢れる第三楽章のメヌエットが、あの情景にとってもマッチしていたことをお知らせしたいと思います。

つい、長くなりました。こんな束の間の「リヤカーおじさん」との出逢いを記して本稿を閉じます。

※1 コロナ禍の究極のソーシャルディスタンスとしても鮮烈なハプニングであった。

※2 【道の駅五城目】は終日モーツァルトがBGMとして流れる施設。ここは里山を背景に多くの旅人のこころを癒している自然と一体型の「道の駅」である。

※3 この出逢いのあと、小生は新潟の留守宅にお父様が元気で五城目を発って盛岡方面に向かわれたことをハガキにしたためて送った。

それから一週間後、リヤカー**蚯蚓屋**が仙岩峠のトンネルで後方から来たトラックに追突され、ご本人が肋骨を7本折る怪我をされたことを奥様からのメールで知らされた。

仙岩峠を勧めた自責の念が激しく小生を襲い、後悔したのは言うまでもない。

ご本人は秋田市の病院にドクターヘリで搬送され、救急措置を受けて3週間ほど入院治療を経て、すっかり快復した由。幸いにも、今もどこの「道の駅」で**蚯蚓屋**稼業をしながら人生を愉んでいる筈である。見舞った返札のハガキにはおじさんらしく「禍福はあざなえる縄の如し」と達観したことわざが記され、末尾には「再見!」とあった。

end

映画「アマデウス」の鑑賞と随想（上）

会員番号 K.203 松田至弘

(1)

「モーツァルト！ モーツァルト 私を許してくれ 告白する 私は君を殺した モーツァルト 君を殺した 許してくれ どうか慈悲を君を殺した私を許してくれ」

かつて、神聖ローマ皇帝ヨーゼフ2世の宮廷楽長であった老アントーニオ・サリエリ（1750～1825）のけたたましい叫び声と謎の告白、そして自殺未遂。……

冒頭では、モーツァルト（1756～91）の「ドン・ジョヴァンニ」からの衝撃音が響き、サリエリが自殺をはかり病院へ運ばれるシーンでは、「交響曲第25番ト短調」第1楽章の悲哀に満ちたミステリアスな音色が劇的に流れる。

「アマデウス」は、このようなショッキングなシーンから始まる映画である。しかも、スクリーンに登場したのは、およそ楽聖とか温和で真面目な天才作曲家のようには見えない、落ちつきなく自由奔放で、奇声を発するなど品位に欠ける青年モーツァルトだった。……

*

ご承知のように「アマデウス」は、レコード・音楽の世界から映画界に進出したソウル・ゼインツによって製作され、ミロス・フォアマンが監督したハリウッド映画である。

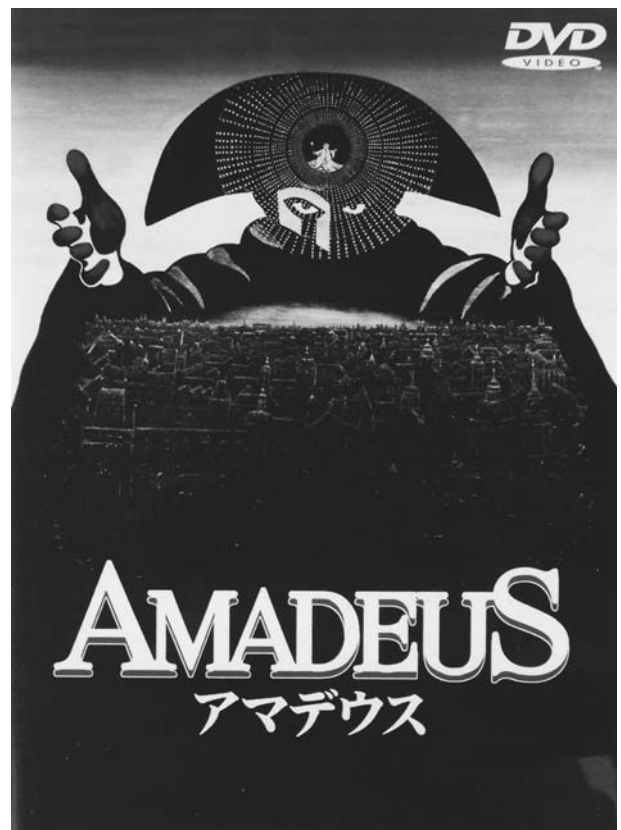
脚本を担当したのは劇作家のピーター・シェーファーであった。「アマデウス」は、モーツァルトの死の謎を題材とした同氏の戯曲をさらに充実させて映画化したものである。

製作年は1984年であるが、当時のハリウッドは伝記映画の隆盛期で、完成した作品は第57回アカデミー賞の8部門を受賞した。すなわち、

作品賞、監督賞、主演男優賞、脚色賞、美術監督賞、音楽賞、衣装デザイン賞、メイクアップ賞である。

受賞数を1984年以前の作品と比較してみると、「ベン・ハー」（1959年）が一番多く11部門、続いて「ウエストサイド物語」（1961年）が10部門を獲得して傑出しており、「アマデウス」は「風と共に去りぬ」（1939年）、「マイ・フェア・レディ」（1964年）、「ガンジー」（1982年）などと同数である。

わが国でこの映画は、1985年2月に一般公開され、日本アカデミー賞外国作品賞を受賞している。そして間もなく、DVDやオリジナル・サウンド・トラック盤のCDなどが発売された。



映画「アマデウス」のDVD

実に多くの音楽愛好家や一般の映画ファン、研究者などがこの作品に接することになり、モーツァルトの天衣無縫で軽佻浮薄な個性に大きな衝撃を受けたが、映画そのものを「娯楽性の高い傑作」と捉えた人が圧倒的に多かったように思われる。(具体的な反応については、後述することにした。)

映画は2002年になると、20分の未公開シーンや監督、脚本・原作者などの音声解説を加え、ニュー・デジタル・マスター版DVDとして甦った。

その後「モーツァルト映画」は、2010年に「ナンネル・モーツァルト 哀しみの旅路」、モーツァルト生誕260年に当たる2016年に「プラハのモーツァルト 誘惑のマスカレード」が製作され、わが国でも一般公開されたが、どちらも「アマデウス」のように話題にならず、また、モーツァルト・ファンの熱狂をさそうには至らなかった。

次に、映画「アマデウス」のストーリーを記してみることにする。

(2)

1823年11月、ウィーンの街の邸宅で、ある夜に一人の老人が自殺をはかった。その老人の名前は、アントーニオ・サリエーリ (F・マリー・エイブラハム) で、雪の降るなかを精神病院へ運ばれた。

後日、症状が安定したサリエーリの病室をフォークラー神父 (リチャード・フランク) が訪れ、心が安らかになるから懺悔をするよう促すと、最初は渋ったものの、やがて驚くべき内容を告白し始めた。

(映画は、サリエーリの告白・回想を通して展開する。)

*

サリエーリは、イタリアの田舎町に生まれた



神父に告白をする老サリエーリ (松竹株式会社事業部発行の映画パンフレットによる)

が、神童モーツァルトの名とその名演のうわさを聞いて憧れを抱いた。少年の頃から音楽を自分の命と理解し、偉大な作曲家になり末長い誉れを得るべく、敬虔な信仰心を持って誠実に生き、努力に努力を重ねた。

音楽の都ウィーンにやってくると、たちまち皇帝ヨーゼフ2世 (在位1765~90、ジェフリー・ジョーンズ) に仕える宮廷作曲家として出世し、人々の尊敬を集めた。

そんなサリエーリの前に、突然現れたのが青年モーツァルト (トム・ハルス) だった。

ザルツブルク大司教のウィーンの屋敷で演奏会が開かれるというので出かけたサリエーリは、若い娘 (コンスタンツェ=エリザベス・ベリッジ) を追いまわし、時折甲高い笑い声をあげ、下品な言葉を発して戯れ合う小男を目撃した。

しばらくしてその背の低い男は、流れてきた美しい曲を耳にすると、「僕の曲だ」と言って大広間に駆け込み、コロレド大司教 (ニコラス・ケプロス) と聴衆の前で楽団を指揮して拍手喝采を浴びた。

サリエーリは、その男がモーツァルトだと知って衝撃を受けたが、また、会場に置かれていた譜面を見て、その音楽のあまりにも見事な出来に感嘆せざるを得なかった。

宮廷で、モーツァルトの歓迎会が開かれることになり、サリエーリは歓迎のマーチを作曲し

て持参した。だが、モーツァルトは、ヨーゼフ2世がたどたどしく弾いたその曲を、譜面も見ず簡単に手直しし、鮮やかに弾いてみせた。皇帝はモーツァルトに、国民劇場にふさわしいドイツ語オペラを作曲するよう命じた。

初めてのドイツ語オペラ「後宮からの誘拐」が完成し、それに歌手のカテリーナ・カバリエリ（クリスチーナ・エバーソール）が生き生きと出演している様子を見たサリエーリは、激しい嫉妬心から復讐の心を燃えたぎらせた。カバリエリは、サリエーリが密かに憧れを抱く女弟子であり、モーツァルトに仕事がらみで“もの”にされたと感じたのである。

サリエーリは、モーツァルトが故郷のザルツブルクに帰ってくれることをひたすら願った。しかし、モーツァルトは、父レオポルト（ロイ・ドートリス）の反対を押し切ってウィーンに定住し、父や姉の嫌うウェーバー家の三女コンスタンツェと聖シュテファン大聖堂で結婚式を挙げてしまった。

ヨーゼフ2世が、姪の音楽教師を採用することになった時、新妻のコンスタンツェは夫のことを心配し、力添えを得るためサリエーリを訪れた。

審査用に提出するための直筆の楽譜「フルートとハープのための協奏曲」などを見たサリエーリは、一か所の直しもない完璧な楽譜に驚愕した。

そこに音楽の至上の美をみてとったサリエーリは、神が敬虔な自分ではなく、下劣極まりないモーツァルトに偉大な才能を与えたことを呪った。サリエーリは、憎い敵のモーツァルトを、王室の音楽教師には推薦しなかった。

そんなある日、父レオポルトがウィーンにやってきた。息子の金銭的状况と結婚生活を心配し、ザルツブルクに連れ戻すためであった。

そんな父と身重の妻コンスタンツェを連れ、

モーツァルトは仮面舞踏会に繰りだした。父は、威厳のある黒の仮面をつけマントをはおった。この舞踏会には、サリエーリも参加していた。

ゲームの達人モーツァルトは、妻と共に羽目はずしてふざけまわり、また、サリエーリの音楽を笑いものにした。結局、モーツァルトはザルツブルクに戻ることは同意せず、コンスタンツェは、あれこれ批判するレオポルトと対立した。

*

サリエーリは、モーツァルトの家をスパイさせるために、ロールという若い娘を手なずけてメイドとして送り込んだ。

皇帝一族が列席する野外演奏会で、モーツァルトが指揮している間にサリエーリは、メイドに案内させてモーツァルトの部屋に偲びこみ、上演を禁止されていた戯曲「フィガロの結婚」をオペラにした楽譜を発見する。皇帝はまた、バレエのあるオペラも禁止していた。



宮廷で「フィガロの結婚」について説明するモーツァルト（『ザ・ムービー』No.25による）

ヨーゼフ2世からの呼び出しがあり、禁止している戯曲をなぜ作曲するのかと問われるとモーツァルトは、「このオペラは政治的なものではなく、愛についての軽い喜劇です」と熱心に内容を説明してきり抜けた。ヨーゼフ2世はリハーサルの舞台を見て、劇場監督がカットさせたバレエ音楽を復活させた。

「フィガロの結婚」の初演を観たサリエリは、その見事さに打ちのめされ敗北感を味わったが、皇帝には長すぎ、最後にあくびをさそった。一方ヨーゼフ2世は、サリエリの新作オペラを観て、聴衆の前で称賛した。

モーツァルトが、友人の興行師シカネーダー（サイモン・キャロー）たちを客として自宅に招き入れた夜、妻からザルツブルクの父が死んだことを知らされた。モーツァルトは、失意のあまり酒にのめり込むことになったが、依頼されていたオペラ「ドン・ジョヴァンニ」を何とか完成させた。

サリエリはこのオペラを観て、モーツァルトの父が死後も息子にとりつき支配していることを悟り、神とモーツァルトに復讐し打ち負かす方法を思いついた。

それは、ウィーンの舞踏会でレオポルトが用いた黒の仮面とマントをつけ、匿名で「レクイエム（鎮魂曲）」を注文し、それが完成した暁に殺害し、その上で葬儀の際に、死を悼む自分の曲として披露し永遠の名声を得る、という恐ろしい方法であった。

サリエリはさっそく、仮面の男に変装してモーツァルトの家を訪れ、報酬の前金を渡して仕事を依頼し、作曲にとりかからせた。

そんな時、モーツァルトは妻と子供を連れて、シカネーダーの民衆劇場で奇想天外の楽しい舞台を見たが、そこでシカネーダーは、自分のために派手な大衆オペラを作曲するよう話を持ちかけ、引き受ければ報酬として興行収入の半分

を支払うと約束し承諾させた。

モーツァルトは、黒の仮面をつけた男と友人のシカネーダーの両方から仕事を依頼され、早く作品を完成するよう急き立てられることになった。

借金が重なり苦しい生活に陥り、酒を飲みながら夜遅くまで仕事が続く、モーツァルトは精神的にも肉体的にも疲れきり追いつめられた。

そんなモーツァルトであったが、一方でオペラ「魔笛」を作曲するためにシカネーダーが用意した仕事小屋で、劇団員の女たちとどんちゃん騒ぎをして楽しんだ。怒ったウェーバー夫人は、コンスタンツェを家出させた。

「魔笛」が完成するとモーツァルトは、超満員の民衆劇場で自ら指揮して初演した。だが、「夜の女王」のとどろく歌声のなかで具合が悪くなり、遂に倒れてしまう。それを見ていたサリエリは、馬車に乗せられたモーツァルトにつき添い、留守になっている家へ運んだ。

サリエリの悪意を知らないモーツァルトは、「あなたは親切な方だ」と感謝し、サリエリは「君は最高のオペラ作曲家だ」と褒めそやした。そして後から、シカネーダーたちが心配し分け前を持ってやってくると、それを受け取って帰らせ、憔悴してベットに横たわるモーツァルトには、「レクイエム」の依頼者が来て明晩までに完成させれば更に100グカットを支払うと言っていたと嘘を伝えた。

モーツァルトが力をふり絞って口述し、サリエリが筆記して手伝い、休息もせず夜を徹して作曲は続けられた。しかし、完成させることはできなかった。

保養地にいたコンスタンツェは虫の知らせを受けて気になり、子供を連れて馬車で家路を急いだ。やっと家に着き、夫を抱きしめて言葉をかけたものの、モーツァルトは間もなく力尽き、息絶えた。

コンスタンツェは、未完の「レクイエム」をサリエリに渡さず、サリエリの計画は成就せずに終わることになった。

聖シュテファン大聖堂で葬儀が行われた。雨のなかをわずかな知人に城門まで見送られたモーツァルトのなきがらは、粗末な馬車で郊外の墓地まで運ばれた。そして、麻袋に入れられた遺体は、共同埋葬の墓穴へ無造作に放り込まれ、その上に石灰が撒かれた。

*

フォーグラール神父に告白し続けてきた老サリエリは、うすら笑いを浮かべながら最後に「32年間も私は苦しみ抜いてきた。私の音楽は忘れられ今では演奏もされない。神は凡庸な私にはわずかな栄光も与えなかった。あなたも凡庸な人間の一人だが、私は凡庸なる者の守り神だ」と語った。

酒とモツの日々 (44)

会員番号 K.488 佐藤 滋

12月5日はMOZARTの命日。例年、モーツァルト広場の忘年会（アニヴァーサリー）が行われます。今年はコロナ禍に配慮して日曜の早い時間に変更されました。コロナと菅総理誕生以外は何もなかった一年ですが、巷では恒例「忠臣蔵」の時節となります。

忠臣蔵といえば、ワンパターンの討ち入り物語と思われがちですが実際は吉良上野介 vs 浅野内匠頭の確執から、浪士一同切腹までの約2年、赤穂浪士の離合集散、葛藤、挫折、決起、さらには家族の運命、スパイ、腹の探りあい等、様々な人間ドラマが繰り広げられます。だからこそ古今数多くの映画、ドラマが創られてきました。お約束の討ち入り場面まで、どんな構成、視点で話を盛り上げてゆくかが作者の腕の見せどころ。観衆は、浪士たちの苦悩に共鳴し、共感し、登場人物と一体になって、やがて12月14日の雪が舞う劇的なラストシーンを迎えます。

MOZARTのラストシーンも劇的なものでした。レクイエム第7曲の8小節目で力尽き、後の作曲を弟子に託して永眠。雪混じりの雨に

埋葬に立ち会う者は誰もいませんでした。曲の完成に向けて、師が弟子に何を語ったかは伝わっていません。低音進行や構成の下準備は出来ていたとはいえ、MOZARTの言葉は弟子ジュスマイヤーにとって天命のような響きをもっていたに違いありません。託された弟子は師の言葉に導かれて、実力以上の仕事をし、やがて名曲「レクイエム」が世に出ます。

昨年、松田先生の著作でドーラ・シュトックによるMOZART生前最後の肖像画が紹介されましたが、これは死の約2年前と言われています。やっと宮廷作曲家に任命されて定収入も得られ三大交響曲も完成し、これから円熟という時でした。でも私はこの肖像画を見ると、生気と死相がせめぎ合っているような気がしてきます。夢を語るように大きく見開かれた眼差しと乱れた頭髮、微笑む口元と目の下の隈、豊かな二重顎とやつれた肌……。評論家・吉田秀和の言葉「MOZARTの音楽。それは遊びの中に真剣さがあり、明るさの向こうに哀愁があり、笑いのなかに涙がある。こんな音楽を書い

たのはMOZARTだけだ・・・」。相反するものが同居する音楽。そして、それをそのまま描いたような肖像画。彼はまだまだ作曲するつもりだったのでしょ。けれども画家の鋭く冷徹な観察眼は、すでに2年後のラストシーンを予知していたのです。

亡き殿の仇を討ちたい、そんな思いを持って集まった四十七士。事を成すには一人では出来ない。統一された集団の力こそが世を変えることが出来る。しかし彼らは皆、何かを通り抜け、何かを背負って今ここに居る。思いも手法も背景も様々。そんな彼らを繋ぎ、立ち上がらせ団結させたのは大石内蔵助の言葉でした。「政は言葉」と言います。新総理にも期待していますが、人の心を変えるのは権力ではなく言葉です。討ち入りの場面でも大石は刀を抜きません。言葉を持つ大石の存在そのものが浪士たちの働き

の源となるのです。一方で大石は、茶屋狂いを演じて大酒を呑みながら秘かに討ち入りの為の軍資金や武具の下準備を重ね、浪士たちの実力発揮の為に腐心していたのです。

わずか2年後に終末が襲って来るなど、MOZARTも吉良上野介も思いもしなかったでしょう。私も年をとると、あんなに元気だった人が体調を崩したと聞いて驚くことが多くなってきました。MOZARTや赤穂浪士のように世に残せるものは何もありませんが、せめて残される者に迷惑をかけないように、終末に向けて日々心して暮らして行くのが高齢者の務めだと思います。寝酒は今後節制いたします。

ラストシーンで大石内蔵助も述べております。「おのおの方、これより先くれぐれも油断召さるな！」

編集後記

今年新型コロナウイルス感染症に振り回された1年でした。日常が一変し、ある意味人間も進化しなければいけなんだなと感じましたね。

さてモーツァルトのホルン協奏曲はご存知でしょう。僕が高校1年生の時にあるプロ奏者の方と母校吹奏楽部で共演したのを今でも強烈に覚えています。実は今回トロンボーン

でこの曲を吹こうと思っていたのですが諸事情で欠席することになりました。が、楽譜は用意しましたのでこれからみっちり練習し、みなさまの前にお聞かせできるよう頑張ります。その日を楽しみにしててください。トロンボーンの音色もホルンに負けないくらい柔らかく綺麗なものですよ。(K575)

「モーツァルト広場」ではいつでも会員を募っております(R2年12月現在90名) [モーツァルト広場](#)

入会金：¥2,000 年会費：¥3,000 (諸会費、別途) ご紹介下されば幸いです。

お問い合わせ……〒010-0954 秋田市山王沼田町10-11-203 加藤 携帯電話 090(7939)4058
又は 本田 (事務局) 080(1673)8322